

持続可能な社会の創り手を育む包括的平和教育

—ESD・SDGsの視点を関連づけて—

竹島 潤・渡邊 晶・三村 悠美子・米林 哲郎・奥田 陽一

1 はじめに

先の大戦から75年が経とうとしている今、戦争の記憶をいかに継承するか、戦跡の保存をどうするかなどの諸課題が議論されることも多い。また、「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」（教育基本法第1条「教育の目的」）、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」（ユネスコ憲章前文）、「One child, one teacher, one pen and one book can change the world. Education is the only solution. Education First. (1人の子ども、1人の教師、1冊の本、そして1本のペン、それで世界を変えられます。教育こそがただ1つの解決策です。教育を第一に。）」（マララ・ユスフザイ氏・2014年ノーベル平和賞受賞）にも示されるように、教育により平和な社会や国家を創造することの重要性は、今も昔も明確に認識されている。

本校は岡山市中区東山地区にあり、近隣には玉井宮や岡山縣護国神社、大福寺などの寺社をはじめ、戦災や戦争記憶につながる場所を有している。こうした地域リソースを生かした平和学習を認識と行動の両面で広がりとし深まりをもたせながら行うことで、主体的に平和形成にかかわることのできる生徒を育てることにつながると考えた。また、直接的な平和教育のみならず、そこに繋がりうる人権教育や国際教育などの総合的な学習の時間（通称「ER」）における取り組みを包括的に平和教育として位置づけて実践することが有効だと考えた。

グローバル化がさらに進む中、人間社会の経済的発展は有限であることへの理解が深まり「持続可能な開発のための教育（ESD）」や「持続可能な開発目標（SDGs）」の考えを位置づけた教育実践の必要性が高まっている。本校の総合的な学習の時間では、持続可能な社会づくりにおける「構成概念」「重視する能力・態度」「留意事項（3つのつながり）」（2012年 国立教育政策研究所）に留意しながら、「社会に参加・参画・貢献・寄与できる生徒の育成」に取り組んでおり、平和教育実践も同様である。

そこで、本稿では岡山空襲を題材とした学習を起点に、平和問題をできるだけ広い視点から包括的に捉え、持続可能な社会づくりを目指し、平和問題をより広くかつ深く子どもたちに理解させようとする「包括的平和教育」の視点で取り組んだ実践について考察し、3年間を見通した平和教育実践の確立につなげていきたいと思う。

2 目的

「3年間を見据えて継続的かつ包括的な平和教育をおこなうことで、生徒は持続可能な社会づくりの礎である平和創造の主体として必要な資質・能力を高められるだろう」との仮説に立ち、ESD・SDGs視点を意識した平和学習プログラムを提案する。

3 方針

上記の目的における「継続的」とは、単一学年の取り組みとしてではなく、3年間を見据えたうえで、学習内容の把握しやすい学習プログラムに取り組むことを意味する。

また、「包括的」とは、戦争がないだけでは不十分とする「積極的平和」の考えに基づいている。これは「構造的暴力」（1969年ノルウェーの平和研究者ヨハン・ガルトゥング）、「包括的平和教育論」（1988年ベティ・リアドン Betty A. Reardon：コロンビア大学教育学大学院平和教育センター名誉所長）、「平和の文化に関する宣言」（1999年国連総会採択）など平和教育にかかわる諸概念と関連づけられる。

村上登司文（2004）は、平和教育概念を次の5分野に整理している。

- ①平和についての教育（Education about Peace）
- ②平和のための教育（Education for Peace）
- ③平和を大切にす教育（Education in Peace）
- ④教育における平和（Peace in or through Education）
- ⑤積極的平和としての教育（Education as Positive Peace）

具体的には、

- ①直接的に岡山空襲や沖縄戦などの戦争題材（過去）や、国際紛争や安全保障、基地問題などの戦争題材（現代）を扱うこと
- ②日常生活や現場での体験を通じた学びを重視すること
- ③教育方法として参加型や実行委員制での主体的活動を組むこと
- ④クラスや学年、学校の平和的な風土づくりをおこなうこと
- ⑤平和運動、グローバル課題の解決などの行動につながる

といえよう。特に⑤については、ESD・SDGsの視点と関連づけて取り組むことが効果的である。国連広報センターはSDGsの構造を「5つのP」で解説している。「人間生活 (People)」「豊かさ・繁栄 (Prosperity)」「地球環境 (Planet)」「平和 (Peace)」「協働 (Partnership)」である。ここでも「平和 (Peace)」が最も重要な要素の1つであることが明示されている。このように、「包括的」とは平和教育を広い認識と有機的につながりの中で推進する視点である。

4 実践 (2018・2019年度の取り組みから)

①平和学習プログラム

《第1学年 (2018・2019年度) 5～6月》

ESD (持続可能な社会づくり) の視点を大切にしながら、さまざまなテーマ (国際・キャリア・人権・情報など) で外部・専門機関との連携を含んだ講座制の取り組みをおこなった。このうち、「平和」については、東山地区の戦災記録に関する資料を集め、授業時数と活動時間の制約を満たしながらも、岡山空襲のインプットをおこなうことができた。

【取り組んだ内容】

○岡山空襲パンフレットを用いた事前学習

デジタルミュージアムから1人1冊パンフレットを取り寄せ、ビデオ教材と資料を用いて、岡山空襲の概要について学んだ。

○本校近隣地域 (東山地区) でのフィールドワーク

講座担当の教員のみではなく、担任や学年団の教員もできるだけ引率随同行し、平和学習をともにおこなった。訪問する戦跡は「岡山空襲戦災の記録史」をもとに、次の箇所とした。

※訪問場所

浄教寺、大福寺、玉井宮 (本殿や鳥居)、防空壕跡 (本校テニスコート裏)

【所感】

学校のすぐそばで、生徒にとっては部活で走ったり、校外遠足で通ったり、通学路で通ったりする場所だったので、「知らなかった」「こんなところに」という声を聞いた。大福寺では、実際の焼夷弾を見せていただいたり、ご住職さまのお話をお聞きしたりして、特に実感をともなった学びとなった。年度末に、総合的な学習の時間の全講座について、自己評価アンケートをおこなった。平和の講座については、全講座のうち、もっとも生徒にとって記憶に残り、学びのあるものの1つとなった。

《第2学年 (2019年度) 》

総合的な学習の時間の各学習プログラムに、実行委員会方式を取り入れた。生徒の参加や主体性を高めるとともに、発信力や行動力を伸ばしたいと考えたからである。平和学習については、前年度から行動範囲を広げて、6月岡山市内中心部へのフィールドワークと発展させることとした。各クラスのリーダーなど計20名から成るER (平和) 実行委員会は、学級での班別自主研修の計画や基本情報の共有、学年授業やクラスおよび学年での学習成果共有会の運営などを担当した。

【取り組んだ内容 (前期)】

○ER平和実行委員会 目的やメンバーの確認、仕事内容の分担

○家族や親せきなどへの聞き取りをおこない、証言集を共有。

※ワークシート、証言集：直接または間接的な戦争体験の聞き取りを実施。提出は任意とした。

約70名/約180名の生徒から提出があった。下記は一部抜粋。() は本人との続柄を示す。

- ・(曾祖父) 海軍で負傷兵の手当をする仕事などを任されていた…トラック島、フィリピン沖などをめぐっていた船が攻撃され、沈没し、海へ放り出され、何日間も海の中にいて、がれきにつかまりながら、助けられるときを待っていた…仲間は恐怖と空腹に「天皇陛下、万歳、お母さん」などと叫びながら次々沈んでいった。

- ・（近所の方）6月29日当時、12歳…真夜中に寝ていたら、母が「空襲だよ！」と起こしに来てくれて、防空壕に隠れていたら、近所のおじさんに「丸焼けになるぞ！」と言われ、北へ走って避難されたそうです…（焼夷弾が落とされた後は）何もなくて、コンクリートで立てられた建物がポツン、ポツンと立っていたそうです…燃え尽きた家に帰ったら、仕掛けていたご飯が火の熱さで、炊けていたそうです！！岡山に来るはずがない！と思っていた当時の人々を、岡山を一瞬で破壊されたときは、思うことが何もなかったそうです…。
- ・（曾祖母）当時、福田に住んでいたのだから、岡山から逃げてくる多くの人を見ていた。その頃、もち米を外で干していると、次の日には何もなくなっていて、盗まれていた。
- ・（祖父）戦後間もない10代の頃、大阪でたくさんあった死体の処理などをしていた…たくさんの方が亡くなっており、虫がたくさんわいていた。辛く、悲しかった。正直、嫌だった（他は話したくなさそうだった）。
- ・（曾祖父）ビルマ（今のミャンマー）に行っていた。英語が使えたので、通信担当をしていた。
- ・（曾祖母）徳島市で就寝中に「にげろ！」というかけ声で逃げたが、とたんに大雨が降ってきた音がした。耳をふさぎながら逃げた。周りがとても熱かった。防空壕へ避難しようとしたが、畑に逃げた。後から聞くと、防空壕へ逃げた人の多くは亡くなっていたらしい。家に帰ってみると、他の建物はなくなっていたが、柿の木1本が残っていたらしい…。
- ・（祖母）6月29日の岡山空襲で、奥市のグランドに近所の人たちとともに逃げていった。祖母の父となかなか会えなかった。空が赤くなって、花火のようだった…。
- 図書館に特設展示コーナーを開設（書籍・焼夷弾・パネル資料）
- 平和FWにむけた事前学習（昨年の復習と概要の説明、行き先や行動計画の立案）
- 岡山空襲語り部講演会
講師：日笠 俊男さん（元岡山空襲資料センター代表 元中学校校長・本校OB）
- ※生徒感想より一部抜粋
- ・戦争は今私が思うと怖いと思うけれど、当時の人はそれが当たり前になってしまっていた。それくらい当時は戦争が日常化していたとおもうので、やっぱり戦争は恐ろしいと思った。私が特に印象に残ったのは、屋根が焼け落ちて屋外で授業をやり続けるということだ。今ではこんなことがあったら安全な場所へすぐに移動することが可能だけれど、当時はそんなこともできなかったのだと思うと、絶対にもう二度と戦争を起さたくない…。
- ・この講演会で特に印象に残ったのは、死んだ人が転がったりしていても驚かない、ということでした。今の時代では、そんなことはありえないので、やはり戦争と今ではそんなところも違うのだなと思った。今こうしてご飯を食べられて、学校に通って勉強できているのはありがたいことだなと思いました。このまま平和を続けていけるように、自分ができることはしていけるといいなと思った…。
- ・正直なところ、よく分からなくて理解ができていないところが多くありました…まず私が知らないといけなくて考えるので、これからのERに取り組むやる気ができました。
- ・…女の子の足がちぎれたエピソードを聞いて、とてもむごいと感じました…平和や戦争のむごさについて知り、世界が平和の方向に向かうようにしっかりしたいと思います。
- 平和フィールドワーク（岡山市中心部・シティミュージアム）
岡山空襲や平和都市・岡山に関する問いを探究するプロセスとしての現場学習。
※訪問場所：岡山シティミュージアム（展示鑑賞）・蓮昌寺・岡山神社・金刀比羅神社・岡山城天守台・岡山城石山門跡・田町橋・本行寺の内から、必須／自由選択の訪問ポイントを設定した。
- 各クラスでのふりかえりと共有
- 6月29日（土）岡山市戦没者追悼式（岡山市民ホール）平和実行委員他有志参列
- ER平和学習報告会（学年授業）
デジタル紙芝居「岡山空襲」の上映（作成：岡山県退職女性教職員の会）
実行委員会による報告や意見交換会をおこなった。保護者の方々や岡山市福祉援護課の方などもご参観に来られ、戦争や空襲の悲惨さについて若い世代が継承することで、平和を求める運動に取り組むことへのご称揚をいただいた。
- 【取り組んだ内容（後期）】
前期の取り組みをふまえて、後期は第3学年ER沖繩宿泊学習にかかわる平和学習に取り組んだ。沖繩平和学習プログラムの目的として、下記を設定した；

1. 戦争の悲惨さや命の尊さについて理解を深め、戦地を実際に訪れて、平和な社会の形成者としての役割を、生徒一人一人が探求できるようにする。
2. 平和実行委員会のメンバーを中心に平和集会を企画・運営し、一人一人が平和を願い、主体的に行動しようとする思いや考えを追求する。
3. 米軍基地問題や安全保障など今日的な諸問題について理解を深め、多面的総合的な視点から考え、持続可能な差別や偏見に惑わされずによりよい社会をつくろうという意欲、態度を高める。

その上で、下記の取り組みをおこなった；

○沖縄戦に関する学習（「白旗の少女」「ひめゆり学徒隊～青春と死～」「さとうきび畑」など）
実行委員会による広報および事前学習資料の作成と、視聴覚教材を活用して学んだ。

※「ひめゆり学徒隊～青春と死～」生徒感想より一部抜粋；

- …自分が生きているのは、たくさんの方の努力があったということをおぼれたいようにしたいと思った。
- …教育の仕方で人が変わってしまうということ、そして教育の大切さも学ぶことができました。この戦争の悲惨さ、平和のありがたさといったものが風化されぬよう、伝えていけるようにしたいです。
- …私達により年齢が近いひめゆり学徒隊は、医学の知識も無いまま病院へ、足手まといは処置でという、こんなにもひどいことがあるのかということを感じた。今まで平和について学んできているが、やはり戦争はいけない。
- …もしもじぶんだったらと思うと、とても怖かった。今、悩んだり楽しんだりできるのもこの平和な日常のおかげだということをおぼれずに、3年生の沖縄研修などで生かしていきたいです。
- …見えない命と命の繋がり、少し難しく感じるが、互いが相手を大事に思い、尊重し合って行ける世界になってほしい。そして、そんな人になりたい。

○ER沖縄（平和）実行委員事前研修会

戦場経験者を講師に「平和と戦争」をテーマとしてディスカッションをおこなった。

※生徒感想より一部抜粋；

- ・戦争がどのようなものであるかをよく知っている方からお話を伺うことができ、良い経験になった。則武先生のお話を聞いて、戦争とは何か、軍隊とは何か、少しでも知識を増やすことができました。2年生全体として、まだ平和に対する考えもあいまいだと思うので今回の僕のように、より多くのことを知ってもらい、以前よりも平和に対する強い思いを持ってもらいたいと思った。
- ・自衛隊や戦争についてテレビなどでは報道されないような裏側のことや深い部分のことまで知ることができた。日本に住んでいる一人の人間として自国と関係のある戦争のことももっと知らなければならないと感じた。今後の活動や講演会でも知識を深め、自分の将来や沖縄研修にもつなげていきたい。
- ・実際に戦争を経験された方の話を伺うとDVDや映画にない現実的な話を聞くことができました。また、戦争経験者だからこそ言うことのできる、政府や隊員が言えない軍隊、平和についての意見も非常に深いものでした。今回の会を通して学んだことをこれからのERに活かし、実行委員として、また、唯一の被爆国の一人として、社会貢献していきたいと思えます。
- ・普段の日常生活で、戦争について考えることは何度かあったけれど、過去のこと歴史上のことだと思っていたので、今回のお話を聞いて驚くことがたくさんあった。今までの平和学習とはまた異なる視点のお話だったので私たちだけでなく生徒全員にも知っておいてもらいたいと思った。今回で学ぶことができた、戦争に対する視点で他の学習も取り組んでいきたい。

○学年授業（講演会など）

「我が国と海洋」（元海上自衛隊海将補・佐藤信彦先生）や「ポリグロットの考える“平和で持続可能な社会”とは？」（多言語話者／通訳・翻訳家 タカ大丸先生）など、現場や海外の最前線で豊富なご経験やご人脈を有される方々からのご講演と意見交換により、多面的総合的に学ぶ機会を確保することができた。

※「我が国と海洋」生徒感想より一部抜粋

- ・私は多面的に見ることが印象に残った。球体の地球をどんな視点で見ると、その国中心か歴史をふまえるかで国ごとに捉え方が違った…自ら海上のことを知ろうとして、海上問題、石油などのエネルギーについて解決していきたい。
- ・…一番印象に残ったのは海上貿易の航路についてだ。海上の安全や平和を守るためには各国の協力がとても重要だと分かった。
- ・日本は石油のほとんどを輸入に頼っており、将来が不安になるなと感じた。また、他国に頼っていると

いうことは、生存と発展のために良好な関係を保つことが必要であると思った…。

- ・戦時中の日本の貿易航路の弱点がかめたことと、資源の乏しさが戦後の日本の国際協力やグローバル化とつながっていたのだと気づきました…。

【所感】

プログラム終了後に平和学習実行委員20名に、「自身が伸ばせた／大切にできた能力・態度」に関するアンケートを行うと、すべての能力・態度において95%以上の生徒たちが肯定的回答（5および4）であった。特に、「コミュニケーション・協力」「参加（責任）」の2項目で、自身の能力が伸びたことへの自覚があるかどうかについて「5（大変あてはまる）」と回答した生徒が多かった。また、その他生徒の記述コメントでもっとも多かった視点は、「次世代に伝えていく大切さや責任」であった。平和の実現に大切な「コミュニケーションや協力」「参加」そして「次世代への継承」にかかわる自己評価が高かったことはよかったと思う。

②総合的な学習の時間全体

本校の総合的な学習の時間は、さまざまなトピックについてESD・SDGsの視点を関連づけておこなっている。SDGs：Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）は、2015年9月の国連サミットで採択されたもので、国連加盟193か国が2030年までに達成するために掲げた、「17の目標・169のターゲット・232の指標」である。このうち、目標4「質の高い教育をみんなに」は教育にダイレクトに関わるものであり、特にターゲット4.7「2030年までに持続可能な開発のための教育（…中略…）を通して、すべての学習者が持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技術を習得できるようにする」では、ESDがSDGs達成に向けた手段の一つとして重視されていることが示されている。

下記は各学年で重視しているステージである；

- （第1学年）外部・専門機関の方々とともに講座制でインプット重視の取り組み
- （第2学年）実行委員会方式、パネルディスカッションなど主体性を高める取り組み
- （第3学年）個人テーマ探究≪課題発見－情報収集－仮説の設定と検証－考察・まとめ－発信・行動≫のサイクルを習得・活用した取り組み

第2学年におけるERテーマ学習プログラムに対する実行委員生徒募集（表1）を通して（各プログラムの詳細は割愛）、1年間でER実行委員を経験した生徒数は、のべ70名以上（学年生徒の1/3強に相当）となり、今後の活躍が楽しみである。

令和元年7月【各クラス・学年掲示】 第2学年 ER実行委員会 委員募集のお知らせ 総合担当			
今年度の第2学年ER（総合的な学習の時間）では、 ★問いをもちながら学ぶ ★学びがりを大切に ★自ら考え、行動する などを重点として、取り組みをすすめています。 ここまでの京都宿泊研修、平和学習でも、ER実行委員の活躍、尽力が生きています◎！次は、これから予定されている取り組みの一覧です。どれも、ER実行委員のやる気や活動にかかっています。積極的な応募をお待ちしています！			
第2学年 秋			
	ER（こころ）	ER（国語・ワト）	ER（キャリア）
目的	こころの病について学び、こころに向き合い、マネジメントする力やさまざまな人と助け合い、支え合う社会を創る意欲を育もう。	過酷な状況でもあきらめず、前向きに歌い、踊るワトの子どもたちと交流し、夢と希望を育み、視野や世界観を広げよう。	さまざまな世代・職種の人たちと対話を通して交流し、職業や人生についての考えを深め、心を育てよう。
学び			
SDGs			
募集定員（各クラス）	生徒委員1～2名 + 有志2名	2～4名	3名
主な取り組み	9/2（月）学年講演会 9/3（火）学級授業 9/4（水）当事者の方々と交流会	10/16（水）交流授業（音楽、英語） 芸術鑑賞会 10/18（金）岡山1971に－ホール公演 10/19（土）倉敷市民会館公演	9/11（水）学年授業 10/9（水）期中生だっぴ 10/23（水）職業人に学ぶ会 12/4（水）11（水）キャリアフィールド訪問
※詳細は別途			
キーワード	人権 福祉 精神科医 メンタルヘルス 統合失調症	音楽 英語 ダンス ウガンダ 希望 Let Us Run!	多世代交流 だっぴ 参加型 ワークショップ 生き方 将来の夢
関係機関	岡山大学 慈恵病院 NPO LIFE ちどり ステップアップ	Watoto ワトト NPO ICOI 未来を創っていく会おひやま	岡山大学各学部 各企業・団体さま NPO だっぴ 岡山NPOセンターなど
活動期間	7月～9月	9月～10月下旬	9月～12月
募集〆切	7月12日（金）放課後まで		

令和元年11月【各クラス・学年掲示】 第2学年 ER沖繩（平和）実行委員 募集のお知らせ 総合担当	
今年度の第2学年ER（総合的な学習の時間）では、 ★問いをもちながら学ぶ ★学びがりを大切に ★自ら考え、行動する などを重点として、取り組みをすすめています。 ここまでの「平和学習」「こころの病について学ぶ授業」「ワトとの交流」「キャリア学習」でも、ER実行委員の活躍、尽力が生きています◎！ 次は、来年度のER沖繩に向けての実行委員会です。第1、2学年での平和学習をどれだけER沖繩につなげられるか、より意味のあるものにできるかはER実行委員のやる気や活動にかかっています。積極的な応募をお待ちしています！	
第2学年 冬～	
目的	○第1学年ER平和での本校近隣のフィールドワークで学んだことや、第2学年ER平和での空襲体験者による講演会、市街地のフィールドワークで学んだこと、考えたことをさらに深める。 ○第3学年でのER沖繩に向けて、平和に関する今日的な諸問題についての理解を深め、多面的総合的な視点から考え、持続可能な社会をつくらうという意欲を育む。
学び	
SDGs	
募集定員	各クラス 生徒委員1～2名+ 有志1～2名
主な取り組み	12/21（土）実行委員会事前研修会 （講師：更生保護法人古松園福祉専門職員 元フランス外人部隊 則武秀明先生） 1/22（水）学年授業・講演会「我が国の海洋」 （講師：倉敷芸術科学大学客員・元海上自衛隊海防補 佐藤信彦先生） 2/12（水）学年授業・意見交換会 「ボリログロットの考える“平和で持続可能な社会”とは？」 （講師：多言語話者 翻訳家・通訳者 タカ大丸先生） 3/4（水）学年授業・講演会 「シリアの人々とともに～人質40ヶ月からの自由～」 （講師：ジャーナリスト 安田純平先生） 5/27（水）学年授業・講演会「日本の安全保障と米軍基地」（仮題） （講師：エルドリッチ研究所所長 元在米米軍海兵隊法務部長 R.エルドリッチ博士）
※詳細は別途	
キーワード	生きる 安全保障 自衛隊 戦争 平和 海洋 ボリログロット 民泊 翻訳家・通訳 シリア 人質 テロ テロリスト 基地 沖繩戦 日米安保
関係機関	上記の講師情報を参照
活動期間	12月～令和2年7月
募集〆切	12月13日（金）放課後まで

表1：第2学年 ER テーマ学習プログラム実行委員募集用紙

参考【ESD・SDGsと教育活動を関連づけることによる利点】

- ①各教科、学年、分掌などの取り組みを横断的につなげられること
SDGsと照らし合わせながら学習活動や学校行事など、教育活動全体をわかりやすく整理できる。各教科、特別の教科、道徳等以外に環境教育・福祉教育・国際理解教育・キャリア教育・情報教育・人権教育等は、SDGsの視点が含まれる学習のアプローチといえる。
- ②地域や社会における教育の意義や可能性を発信できること
「試験のために学ぶ」「お金のために働く」という考え方から、「未来をつくるために学ぶ」「未来をつくるために働く」という考え方へのシフトを促す。
- ③SDGsを共通言語に、さまざまな外部・専門機関との協働が実現すること
「社会とつながる教室・学校（教育）」を推進することができる。
- ④保護者や地域の方々にも「持続可能な社会づくりへの参画」を発信できること
- ⑤多様性や多面的総合的な見方・考え方、コミュニケーション力などを高められること
SDGsの各ゴールは一つ一つが独立しているのではなく、関連し合う相互接続的な目標である。「誰一人取り残さない」「子どもの主体性や参画を重視する」方向性は、相互に認め合い、学び合う学習スタイルを定着させることができる。
- ⑥アクティブ・ラーニング・行動変容につながること
SDGsは理想や遠い未来の目標ではなく、現実的な、喫緊の課題に挑むために今を生きる私たちが必要な目標である。SDGsのキーワードでもある「Transforming our world（我々の世界を変革する）」には、今の世界のあり方を変えなければならないという強いメッセージが含まれている。

5 成果と課題

今年度第2学年における平和学習プログラム終了時に、平和創造に必要な資質・能力についての自己評価（5段階スケール）をおこなった（表2）。項目は、広島市教育委員会が作成している「平和教育プログラム」における中学1・2・3年の観点別学習目標を参考に、①関心・意欲・態度、②知識・理解・技能、③思考・判断・表現の3つの視点で設定した。

【問1】これまでの取り組み全体をふまえて、次のうちもっともあてはまるものに○をしなさい。		
	(5大あてはまる - 4まああてはまる - 3どちらでもない - 2あまりあてはまらない - 1まったく当てはまらない)	5+4の%
①	(1) 戦争の歴史や海外の紛争などについて関心がある。	92
	(2) 価値観や主張の違いを、調整して争いを平和的に解決したいと思う。	98
	(3) 戦争の被害者に共感し、平和の問題を自分ごととして考えられる。	89
②	(4) 国際的な紛争(戦争)について、いろいろなつながりがわかる。	80
	(5) 岡山空襲、原爆投下、沖縄戦などの戦争の歴史を理解している。	85
	(6) 戦争や平和について学んだことを、整理・表現し、相手に伝えることができる。	89
③	(7) 戦争について客観的、批判的に考えられる。	92
	(8) 日本の戦争体験を加害と被害の両方の視点から考えられる。	83
	(9) 日常生活や身近にある争いを、暴力でなく平和的に解決できる。	90
	(10) 戦争体験を次の世代に伝えることは大切だと思う。	99
	(11) 日本の戦争体験を世界の人々に伝えることは大切だと思う。	98
【問2】戦争当時の様子や被害者の苦しみについて、あなたはどのように感じますか。		
もっともあてはまるものを1つ選び、○をしなさい。		回答者%
(1) 悲惨だ、人ごととは思えない怒りを感じる	61%	
(2) 実際に体験していないので実感がない	15%	
(3) 自分がその時に生まれなくてよかった	23%	
(4) 特に何も感じない	1%	

表2：第2学年平和学習アンケート（R2.2.8実施）

問1への肯定的回答が高い項目(98%以上)の上位群は「戦争体験を次の世代に伝えることは大切だと思う」「日本の戦争体験を世界の人々に伝えることは大切だと思う」「価値観や主張の違いを、調整して争いを平和的に解決したいと思う」などであった。一方、低い項目は「国際的な紛争(戦争)について、いろいろなつながりがわかる」(80%)「日本の戦争体験を加害と被害の両方の視点から考えられる」(83%)などであった。これは、生徒が社会科などの教科で知識を詳しく理解するのが第3学年であることによると考えられる。沖縄での現地学習と教科学習を関連づけ、今年度の学びが深まることを期待したい。

また、問2「戦争当時の様子や被害者の苦しみについて、あなたはどのように感じますか」に対しては「悲惨だ。人ごととは思えない怒りを感じる」と自分事に捉えられている回答割合は61%で最多ではあるが、それに続く回答と割合は「自分がその時に生まれてなくてよかった」(23%)や「実際に体験していないので実感がない」(15%)などとなった。この結果をどう比較・分析するかは議論の余地があるが、包括的平和教育における「積極的平和」「平和創造の学び」として、学習プログラムをさらに改善していく必要があることは否定できない。教員も生徒も直接的な戦争体験をもたない中で、いかに当事者意識を高め、平和や持続可能な社会の「創り手」を育てていくのか、まだまだ創意工夫が必要だと感じている。

なお、問3の記述回答には「平和でなければ、いかなるゴールも達成されない」「SDGs達成には協力や信頼など、平和な社会だからこそ保障されるものがある」「すべてのSDGs達成は、いろいろな意味で平和な社会づくりにつながる」「持続可能な社会とは、つまり平和な社会だと思う」などの回答が多々見られ、平和創造を持続可能な社会づくりの礎として位置づける認識をもっていることが確認できた。これは、4実践②に見られるように、狭義の「平和学習」のみならず、「人権」「国際」「福祉」などの多様なテーマで、SDGsと関連づけながら幅広いテーマについて考え学び、そのプロセスに多面的総合的に考えたり、批判的に分析したり、主体的に行動したりする場面があったことによると考えている。

最後に、来年度以降に引き続き取り組んでいくにあたっての留意点をまとめておきたい。

- ・第1学年、第2学年と2年間にわたり、戦跡めぐりを取り入れた平和学習プログラムを継続できていることは、学習内容・学習空間の広がり、さらに学びの継続として意義がある。
- ・実行委員会形式により、各活動への主体性を高めたり、学年全体の平和的な風土を醸成したりする取り組みは今後も継続する。また、第3学年の個人テーマ探究活動への接続を円滑に行う工夫が必要である。
- ・地域教材である「岡山空襲」について、地域のフィールドワーク、ミュージアム鑑賞、講演会、特設展示、戦争体験聞き取り、成果報告会、デジタル紙芝居上映、追悼式参列など多様な学習活動と経験は大変有意義である。同テーマに関する小学校の取り組みを知ったり、地域の公立中学校などに実践事例を紹介したりしていきたい。
- ・戦争体験の聞き取り集は、生徒と家族や親戚などの平和や戦争について語り学ぶ機会となったようだ。貴重な証言や聞き取りを、掲示・回覧だけでなく、教科の授業で読み込んだり分析したり、英語科で世界に発信したり、社会科で資料として活用したりなど工夫していきたい。

6 謝辞

本教育実践は、学年や教科を超えた横断的総合的な取り組みの一例である。こうした教育実践は生徒の学びはもちろんのこと、教員や各教科相互の繋がりや関係性を認識させ、促進させてくれるものである。

「持続可能な社会づくり」で鍵となるSDGs17「パートナーシップで目標を達成しよう」が教育現場でこそ必要とされている。また、学年および学校として平和学習プログラムを計画・実施できるのは、本校が紛争・暴力・葛藤などが少ない平和的な状況(場)そして「教育における平和」を有するからである。本稿を通して、教育実践とそのプロセスそのものが有する「持続可能性」や「教育における平和」の重要性がお伝えできれば幸甚である。

ご理解ご協力いただいた本校教職員の皆様、ゲスト講師の方々や関係機関など連携・協働いただいている皆様に感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 文部科学省(2017)『中学校学習指導要領解説総則編』
- 2) 文部科学省(2017)『中学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編』
- 3) 国立教育政策研究所(2012)『学校における持続可能な発展のための教育(E・S・D)に関する研究[最終報告書]』
- 4) 村上 登司文(2017)「平和教育学の展開」『平和教育学事典(ウェブ版)』(平和教育学研究会)
- 5) 広島市教育委員会(2013)『広島市立学校 平和教育プログラム指導資料』
- 6) 小宮山道夫(2011)「平和教育」『広島における原爆・核・被ばく関連の史・資料の集積と研究の現況』
平成23年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書第三部 調査報告